

「マンゴーは甘くほろ苦い恋の味」

昨年定年退職して故郷に戻った。現役を退いたとはいえ体力も気力も十分で、まだまだ何かやれると思いながらもだらだらと行動に移せず一年が過ぎた。テレビの天気予報では今年冷夏だと言っていたが七月の半ばというのに連日三十度を超す猛暑が続いている。俺は居間のソファで横になって小説を読んでいる。外ではセミの鳴き声がかまびすしい。一瞬鳴き声が止んで玄関のチャイムがなかった。沖縄から小包が届いた。

送り主は瑞慶覧薫子。独特の苗字と個性的な名前、ズケランカオルコ。決して忘れることのない記憶が蘇って来る。時間が巻き戻って行く。

俺松山巧が若く行け行けのプロデューサー時代、沖縄に新しいミュージシャン探しの旅に出た。

削	一	娘	刺	て	球	た	ラ	三	触	ド	ラ	も	二	か	と	ブ	た	リ	期
り	の	ー	さ	歌	音	°	イ	日	手	の	イ	ら	日	ピ	い	ハ	°	サ	間
な	男	°	る	う	階	全	ブ	目	が	レ	ブ	っ	目	ン	う	ウ	初	ー	は
が	性	伴	°	三	で	員	ハ	の	動	ベ	ハ	っ	は	と	よ	ス	日	チ	一
ら	瑞	奏	結	人	奏	二	ウ	夜	い	ル	ウ	三	地	く	り	°	は	し	か
も	慶	は	成	娘	で	十	ス	、	た	は	ス	軒	元	る	も	夜	昼	て	月
心	覧	三	し	の	甘	歳	で	名	が	高	で	回	ラ	バ	民	間	いた	、	沖
に	猛	線	て	歌	く	で	若	護	新	か	昨	っ	ジ	ン	謡	二	ラ	入	縄
響	君	（	ま	声	切	高	い	市	し	っ	日	°	オ	ド	酒	軒	イ	っ	に
く	の	サ	だ	が	な	校	四	に	さ	た	回	三	局	は	場	、	ブ	た	入
°	奏	ン	半	ス	い	の	人	あ	は	°	っ	勤	い	°	°	ハ	初	っ	た
女	で	ン	年	ト	メ	同	組	る	感	二	た	務	な			ウ	日	た	初
性	る	）	と	レ	級	の	小	じ	つ	店	の	か			ス	か	日	日	
三	メ	一	い	ー	デ	生	バ	さ	な	の	よ	知	っ			巡	ら	か	事
人	ロ	本	う	ト	イ	だ	ン	な	か	バ	り	人	た			り	イ	ら	前
の	デ	だ	ー	に	ー	と	と	フ	っ	ン	も	に	同			が	ク	事	に
持	ィ	け	か	心	に	い	出	ォ	た	に	出	行	行			始	の	前	に
つ	ー	、	り	に	乗	°	会	ー	°	や	演	し	し			ま	ライ	に	に
三	は	唯	ゆ	突	っ		っ	ク		や	バ	て	て			っ	ライ	に	に
板	粗		し	き				の		や	ン						ライ	に	に

「そうか、薫子は瑞慶覧君と結婚したか。」
マンゴーは甘くほろ苦い味がした。
「マンゴーは甘くほろ苦い恋の味」続
七月の末、去年に引き続き沖縄からマンゴ
ーが届いた。送り主は瑞慶覧猛。おや、去年
の送り主は薫子だったけど、今年はご主人の
猛君が送ってくれたのか。急いで包みを開く
と箱の上に封筒と一枚のCDが入っていた。
何故か不吉な予感が走った。急いで封を切っ
た。
「ご無沙汰しています。その節は大変お世話
になりました。かりゆし娘、デビューは出来
ませんでしたが今でも青春の良き思い出とし
て心の奥にしまっております。去年薫子が突
然マンゴーをお送りして驚かれたことでしょ
う。実は去年の四月に薫子が体調不良で一週
間入院しました。検査の結果は膵臓癌の末期
でした。余命半年の診断でした。

「	や	事	ロ	で	め	レ	今	あ	C			く	い	の	が	入	た	初	の
ど	か	。急	ン	の	て	ッ	帰	た	D			だ	出	子	ら	っ	。C	め	今
う	に	い	ト	レ	休	ス	仁	ま	か			さ	来	供	お	っ	D	て	年
し	手	で	か	ッ	み	ン	城	の	し			い	る	達	聴	い	に	の	三
た	を	ロ	ら	ス	と	が	址	の	い			。	日	が	き	ま	祭	お	月
ん	振	ビ	電	ン	っ	始	の	風	薰				を	手	く	り	便	に	安
だ	っ	ー	話	で	た	ま	景	景	子				楽	伝	だ	で	り	が	ら
、	て	に	で	収	。	っ	が	が	の				し	っ	さ	歌	が	悲	か
折	い	降	お	録	俺	て	っ	流	歌				み	て	れ	っ	し	に	に
角	る	り	客	し	は	二	週	れ	が				に	く	い	た	い	旅	旅
の	。	て	さん	た	ホ	間	が	て	流				し	れ	。	「	お	立	立
休		行	が	曲	テ	が	過	い	れ				て	ま	。	び	知	ち	ま
み		く	見	を	ル	ぎ	た	て	て				お	す		ん	ら	ま	し
に		と	え	聴	の	日	曜	く	く				り	。		が	せ	し	た
。		薰	て	い	部	日	日	る	る				ま			た	に	。	。
」		子	い	た	屋	曜	初	。	。				。			。	。	。	
		が	る	。	で	日							。						
		に	と	フ	今	初							。						
		こ	の		ま								。						

瑞慶覧猛

ル	側	細	だ	帰	レ	薫	「	「	に	フ	案	「	い	「	な	レ	「	縄	「
ー	か	か	と	仁	ン	子	や	じ	頼	ロ	内	そ	で	若	く	ッ	そ	案	何
そ	ら	く	と	城	タ	は	っ	ゃ	む	ン	し	そ	す	い	て	ス	内	も	
の	一	積	言	址	カ	満	た	あ	と	ト	て	う	。	か	大	ン	し	す	
先	望	み	う	に	ー	面	ー	二	先	か	も	。	」	ら	丈	が	よ	る	
の	す	上	。	向	を	の	ラ	人	ほ	ら	ら	」	」	へ	夫	が	う	事	
青	る	げ		か	借	笑	ッ	で	ど	お	お			っ	か	たい	が	な	
い	海	た		っ	り	顔	キ	出	外	う	う			ち	。	が	く	く	
空	は	石		た	て	で	ー	掛	出	か	。			ゃ	」	、	て	て	
と	淡	の		。	名	飛		け	し	。				ら	来	、	、	、	
三	い	城		薫	護	び		る	た	。				で	ま	プ	ロ	、	
段	ブ	壁		子	市	上		か	。					す	ま	ロ	デ	、	
階	ル	、		の	か	が		ら	。					。	し	。	ユ	、	、
に	ー	ウ		一	一	っ		一	。					。	た	。	ー	、	、
彩	と	ー		番	時	た		時	。					。	。	。	サ	、	、
ら	沖	チ		好	間	。		間	。					。	。	。	ー	、	、
れ	の	バ		き	半			半	。					。	。	。	。	、	、
て	濃	ル		な	の			の	。					。	。	。	。	、	、
ま	い	の		場	今			今	。					。	。	。	。	、	、
る	ブ	北		所	今			今	。					。	。	。	。	、	、

で絵画のように輝いている。
海からの心地よい風に吹かれながら場内を一
時間余り歩いた。
「もう昼過ぎだな、腹減ったよ。何か食いに
行くか。何処かいいい店知ってるか。」
「お弁当持ってきて来ました。木陰に座ってたべ
ませんか。」
「それはありがたいな、やっぱり手作り弁当
が一番。特に独身の俺には最高のごちそう
だ。」
二人は木陰の草の上に腰かけて弁当をひろげ
た。スパム握りとソーキの煮つけ、玉子焼き
にから揚げ島らっきよの漬物。
「これ薫子で作ったのか。」
「もちろんです。朝早くから作りました。」
俺は話もせず黙々と食べた。それを見て薫
子は満足そうに笑っている。
「食った食った、お世辞抜きで沖縄に来て一
番のごちそうだった。お前いいお嫁さんにな
るな。」

マンゴーは甘くほろ苦い恋の味

逢坂かのを